

## 令和6年 能登半島地震体験レポート

松平敦實デザイン研究所 松平敦實 [R6.12月寄稿]

### 1. 序章：土地の歴史・祖先の歴史 [文化・地震=伝統文化の中の防災]

人々は自然の四季の移ろう中で、それらの時代を生き継ぎ、<sup>えいようえいが</sup>栄耀栄華を極めた人も<sup>ひんく あえ</sup>貧苦に喘ぎ地獄を見た人も信仰に生まれた人も共に、その土地の水に育ち、大地と風を受けてきた、一粒の米一粒の水も大切にした祖先がいて、その祖父母を通して、育まれた封建と因習、過酷な戦いの時代にも<sup>すた</sup>廃れることなく、山と山河が我が故郷の伝統家屋が（※七尾市直津町）歴史と、自然の食べ物<sup>みの</sup>が豊かに<sup>の とながち</sup>穫っている。能登半島中央部（能登中口）、七尾湾から入りくんだ、南西に位置する所に生誕の、山の中腹に現在38所帯が住んでいます。

七尾市は能登守護職・<sup>しゅごしよくはたけやま</sup>畠山氏で平安時代、西暦794年～1,185年までの約391年間戦国時代を支配し、能登半島全体が自然豊かな風景と静かな環境を提供していたため、中央の貴族や歌人たちにとって魅力的な場所でした。特に、平安時代～江戸時代の貴族たちは、自然の美しさを楽しみながら和歌を詠むことを好んでた。京都からの文化技術を取り入れ豊かな地域にし、畠山氏が七尾城を築き、戦国時代には重要な拠点となり、この山城は、七尾湾を一望できる位置にあり、地域の文化や政治の中心地として発展させました。

この山城の戦は、天正5年に、越後の<sup>うえずぎけんしん</sup>上杉謙信が七尾城を攻めた際の陣地拠点の統治「<sup>ただつまち</sup>直津町」とされていますが、具体的な陣地の場所については諸説あります。当地の先祖代々松平家は正連寺の<sup>しやうれんじ</sup>檀家総代で住職の話では、<sup>ただつむら</sup>直津村の由来は上杉の武士たちが故郷を思い直江津の江を削除し、<sup>ただつまち</sup>直津町とした……。 (城山の標高は300mです。)

七尾城の戦いは、天正4年（1576年11月）から天正5年（1577年）にかけて行なわれ、上杉謙信が能登畠山氏の七尾城を攻め落とした戦いです。その後、織田信長の家臣である前田利家が<sup>なんこうふらく</sup>難攻不落の巨城七尾城を受け継ぎました。

※和歌1：能登半島や七尾市を訪れた著名人たち=藤原定家・紀貫之・藤原道長・在原業平  
天才絵師：<sup>はせがわとつはく</sup>長谷川等伯（安土桃山時代の七尾で生まれ育ち、その後京都で活躍。）

写真-1



写真-2

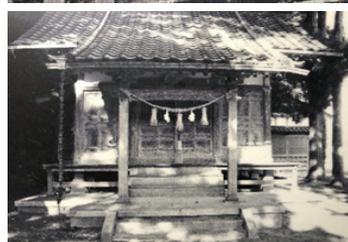


写真-3



写真-4

【社(やしろ)写真1・2・3】 写真4:古民家

写真-1 <sup>いわくら</sup> [磐座] 神の座としされる万物生成、物豊  
穰作

写真-2 <sup>とりい</sup> [華表] 古文書では華表

写真-3 [本殿] 一間社流造

写真-4 古民家=伝統家屋300年～？松平家

※古民家の定義:住む古い家

建物。江戸後期？経過している

◦ 木造軸組構法又は在来工法の民家と定義とされています。

◦ 50年以上経過していること

## 2. 被害を受けた古民家 [地震前と地震後]

普通体験レポートを地震の瞬間をどのように感じたか個人的な思考を交えて描写する。建物の揺れとか自分の行動とか近隣の建物の崩壊等のレポート等で同じパターンの体験談、云々・・・・・・・・。

被害を受けた個人的（松平個人）な思考で報告しようと思います。解体せずに改装を考えに至る。

### 古民家の改修の意義

#### 1. 歴史と文化の保護：2. 環境の配慮：3. 伝統技術の継承：4. 快環境の実現<sup>かいかんきょう</sup>

「伝統とは、過去からの贈り物であり、未来への遺産である。私が生まれ育った土地と300年以上の歴史を持つ古民家は、その象徴と言える。自然の猛威に晒されながらもその歴史を守り続ける誇り、未来永劫と続ける責任でもあります。」

#### 1-1:地震前・地震後(令和6年1月1日午後4時10分)



左図：古民家（正面：松平邸宅）

アズマダチ（吾妻達ち）<sup>あづまたち</sup> 特徴としてはまず挙げられるのは“切妻造の屋根”<sup>きりつまつくり</sup>ではないかと思う。貫と束と呼ばれる梁が重なって雪国に映える白壁と共に大きな屋根を支えており、非常に優雅でパワフルのある外観です。<sup>ゆうが</sup>

これは江戸時代の金沢にある武家屋敷を真似た形であると言われていました。幼いころはアズマヤと言っていましたが、意味もわからずに。



左図：吹抜けの広間（1）

ありがた<sup>ありがた</sup>が幼いころいつ落ちるか心配しながら座っていました。

※自在鉤は小猿という横木に吊り縄をつけて自由に鉤の高さを調節できるようになった。チョウジ、コバシリこざりともよばれた。



左図：欄間（楠）天井：桐の天井<sup>らんま くすのき</sup>

日本式のひとつ。花鳥風月を題材にした彫刻など、意匠を凝らしたデザインで日本人のくらしを彩ってきました。欄間の歴史は古く、奈良時代の寺社建築で採光を目的に取り入れられたのがはじまりだとされています。平安時代には貴族の住宅に採用され、しかし、その無駄な箇所<sup>しやれ</sup>に最高の技巧を凝らすのがお洒落<sup>すき</sup> [数奇] の極致ともいえよう。

※地震後：写真は被害無しでした。

1-1:地震前・地震後 被害なし(令和6年1月1日午後4時10分以降)



図-1 マツカギ



図-2 仏壇(阿弥陀如来)

図-1: マツカギ [最も古い形のもの、  
[マタ状の木を気をつるしただけの  
もの、高低は調設できなかった。  
次に厚板でのこぎりの歯のような刻  
みをつけた鉤に改良され、刻み目  
の数だけは自由に上げ下げできる  
ようになった。

図-2: 仏壇(七尾仏壇)

日本の宗教と哲学は一途に市に対  
して思いを詰めて。春は生命の張  
る既設、夏はねとりの多雨多湿、  
秋は飽く収穫の季節、冬は籠り居  
をてして魂の増ゆるを待つ季節。  
日本でお仏壇が安置された最古の  
ルーツは飛鳥時代の「厨子玉虫」  
です。

2-1 地震後(令和6年1月1日午後4時10分以降)自宅被災1



図-3 御影石塀崩落(凡て)



図-4 正面木製FIX内部床に落下



図-5 玄関4枚引違戸枠より外れる



図-6 外部木製木建具1枚ガラス割れる



図-7 内壁聚楽塗り崩落



図-8 書院建具壁とも落下(竹木舞)



図-9 図8・10の全体図



図-10 図8の別の構図



図-11 桐の天井穴あき



図-12 外壁漆喰塗剥離



2階 和室8畳:壁 剥離



1階外壁:漆喰一部剥離落下、下地竹木舞



庭:石灯籠(いしどうろう)



庭:[十三塔](じゅうさんとう)



庭:[景物灯籠](けいぶつとうろう)。倒壊



庭:[墓地]:御影石の壁4段積倒壊

※.一言「<sup>さんじょうむごん</sup>惨状無言」です。被災後1年近く過ぎ現在修理進行中です。

### 1. 能登半島地震被害状況

- 発生日時: 令和6年1月1日16時10分
- 規模: **M7.6** (暫定値)
- 震源の深さ: 16Km (暫定値)
- 震度: 震度6強
- 回数: 震度1以上の揺れが1,930回
- 被害: 住宅全壊 **6,077件**、半壊 **18,328件**
- 人命被害: **死者483人**

### 2. 日本の人口状況推移

- 日本の総人口: **1億2400万人**
- 15歳未満の人口: 1414万1000人 (前年比33万3000人の減少)

○15歳から64歳までの人口: 7397万3000人

○65歳以上の人口: 3622万8000人 (わずかに増加)75歳以上の人口: 2013万3000人 (前年度比70万2000人増加)

### 3. 家庭内事故

- 年間の死亡者数: 16,050人** (主因は溺死・溺水で全体の43.3%)
- 交通事故**による死亡者数: 年間 **2,678人**
- ヒートショック**での死亡者数: **6,354人** (寒い時期に増加)
- 熱中症**での死亡者数: 2023年は **660名**  
家庭内事故で亡くなる高齢者(65歳以上): 全体の **88.8%**
- 世界の **26億人**が**トイレ**のない生活をしている
- 令和6年度の**自殺者**は **21,837人**です。

※注目すべきは**家庭内事故による年間死亡者数が自然災害による被害者数よりも多いこと**と。

### 3. 災害による未来への引継ぎ

今回の能登半島地震を体験して、令和6年3月15日に、自治体からの郵便が届き、罹災証明書は**はんかい**半壊でした。家屋の物理的な罹災状況は、上記写真の通りです。

玄関入口アルミ4枚引違戸が柱と柱の間の戸が平行四辺形に捻れた反動で外に弾き飛ばされクレセント(鍵)が曲って、使えなくなり、入口は平行四辺形になるぐらいに変形したと思われます。構造体は被害がなく無事に變形がもとに戻ったと思われます。外壁・内壁の一部、漆喰剥離と崩落、建具倒壊その他諸々です。古民家を改修することには多くの意義があり、知己の歴史や文化を象徴する重要な財産です。これを保存・改修する事で、次世代にその価値を伝える事が、また、新たな建物を建設するよりも環境への負荷を減らすことができ、持続可能な境の実現に貢献できればと思います。

もしも耐震基準のその後の見直しで、このような損傷を受けなかった住宅の骨組み(古民家)が参考にしていたらその後の建築基準法改正に見るような、金物仕様の義務強化一返倒にはならなかったのではないかと思います。参考にすべき事例が色々あったのでは、ないかと思います。さらに近年大きな自然災害が世界中に起きている。地震のみで人は死なない、死ぬのは建築が崩壊するからで、我々の責任でもあるのではないかと。つまり天災ではなく人災ではないか。昔の古代人の時代は地震が起きて地面がワサワサと揺れていると、みんな遊んでいたのではないかと、建物が倒壊しても人は死なないから・・・

注: この国は、どうゆう訳かマイナスから学んでも、プラスから学ぼうとしない。

※[1秒遅れの時計は永遠に合わない。しかし、止まっている時計の針は必ず会う]